

私太陽觀測に就て(第二報)

三 澤 勝 衛

結果。僅か半年足らずの觀測から何も新しい發見等のある筈もなく、又左様な柄でもありませんから茲に取立てて御報告申す程の事もありませんが、只先覺者によつて發見し發表された事の二三を直接自分自身に觀測し得たので、其一端を記して見たいと思ひます、

扱て前文にも一寸書いて置きました様に太陽が約二十七日内外の時間を以て自轉して居ると云ふ事が私の僅の内の觀測にも誠にはつきりと現はれて居ります、例へば昨年十月以後の觀測から見ましても、黒點を全く認める事の出來なかつた日が

第一回、自十月一日至同九日約九日間

第二回、自十一月四日至同八日約八日間

第三回、十二月二日至同十日約九日間

あります、尤も此間には雨天等の爲めに觀測をなし得なかつた日もありますが、此場合には前後の關係から推測しての結果であります、そして第四回目は同十二月三十日に復初まつて本年一月二日まで四

日間續いて居ります、第四回目は其日数が前者よりも大變少ない様であります、然し本年一月三日に現はれたものは、普通のものの様に先づ東端に現はれて來たものでなく、太陽の略中央に突發した僅に二乃至四の小異點よりなる一小黒點群で、東端に現はれて來たのは六日頃でありますから此間又七日間程あります、斯の如く黒點群の有無の上にも立派に週期が現はれて居りますが、更に黒點出現の極大に就て考へて見ますと

第一回、十月二十七、八日頃

第二回、十一月二十三、四日頃

第三回、十二月二十日頃

と云ふ様な風で此各極大の期間が何れも約二十七日となつて居ると云ふ事は、自分ながら實に愉快な現象でありました、

次に一度出現した大黒點は長きは半年位も繼續して居ると云はれて居りますが、私が昨年六月以來の觀測の中にも、六月十二日頃太陽の中央に午線を通過した大黒點が、其後、七月九日、十月廿七日、十一月廿四日、十二月二十一日、及本年一月十七日と都合六回出現通過して居ります、然し特に茲に注意

すべきは、途中九月二日頃と九月卅日頃、八月十六日頃のもの観測してありませんので、斷言出來ないのは誠に遺憾の事でありませぬ。二回は全く沈黙して現はれて居らない事でありませぬ、突然地球上の生物が一時冬眠しても一陽來復と共に又活動しだす事とよく似て居ります、太陽面上に於ても大黒點は時に消長はあつても、其根元が中々強く長く一定の場所に其位置を占めて居つて容易に消失し去らない様に思はれます、尙又此黒點は中央氣象臺國富技師の報告(氣象集誌第四十年第八號)によれば、昨年五月八日に太陽の東端に現はれ同月十四日から十五日の間に中央子午線を通過した珍らしい大黒點と同一系統のものらしくありますから、中々壽命の長いものであります、今後の消長も勉めて注意して觀測したいと思つて居ります、次は十月二十一日頃中央子午線を通過したもので初めは單獨の一大黒點でありましたが、二十五日頃急に發達して大小約十個よりなる黒點群となりそれが十一月十七日、十二月十四日本年一月十日と都合四回引續いて中央子午線を通過して居ります、中でも十二月の二十日頃は最も發

達した時期で約二十個よりなつた一大黒點群でありました、以上はほんの其一端でありませぬが更に是等黒點群の移動や他の黒點群との相互の關係並に消長或は太陽面上に於ける分布等も觀測の進むに従つて調査して見たいと思つて居ります、

尙又以上太陽面上の活動の消長と氣象との關係に就ても考へて見やうと思ひまして、手許にありました飯田測候所の半旬期氣象表より平年の毎日の氣壓を計算し、更に官報により昨年十月以降の毎日の該測候所の氣壓觀測を求め兩者を比較して其間に約二十七日の週期の有無を調査して見ました處が右週期が多少は現はれて居る様ではあります(殊に氣壓の低い場合に)尙精密なる調査の上で發表致したいと思ふて居ります

又もや中村要氏の大手柄——

昨年末、中村氏はヘルメウス座に一新變光星を發見し名を擧げたが、今又、同氏は大熊座の星(北斗の中央の三等星が變光してある)も、觀測によつて見事に證明した。それによれば此の星は三・二九等から三・六四等の間に變光し、週期は三四・八日である